

仔羊物語

奴田原睦明

われより深く死なんとする仔羊の眸に遭えるなり

その日は朝から荒れ模様だった。前日は風もなく穏やかな小春日和だったが、シリア沙漠に来て三日目になるその日は、打って変わって先ず寒風が朝から不機嫌に吹き付け、ぼくは思わず身震いをしジャンパーのチャックを首まで上げた。

アブー・アブダッラーのテントの前方五十メートル位の処に金網で囲いがしてあり、そこに先頃生まれた羊や山羊の仔が四十匹ほど入れられていた。仔羊たちは与えられたばかりの命を全身で確かめるように、歓喜の躍動を見せて飛び跳ねていた。ぼくは惹きこまれるように仔羊たちの群れに近づいて行つたが、そんな華やかな喧噪の中に一匹だけ柵の外で頼りなげな声を上げてゐる仔羊が目に入った。よく見ると赤く血に染まつた十センチ程の紐が仔羊の腹から垂れていた。臍の緒を下げたまゝのその仔羊は、春先の寒気の中で寒そうにわなわなと身を振るわせていた。ぼくは上ずつた声でウナム・アブダッラー（アブー・アブダッラーの細君）を呼び、「この仔は大丈夫なのか？」と聞くと、動揺しているぼくを見た彼女はおかしさを隠すようにしながら、「昨晩生まれたのよ」と言った。たしかに傍らには母親の姿があった。だがその親羊は何か他に心にかかるところがあるのか、自分の仔に無関心の様子だった。寒風が吹くと風上に身を置いて仔羊を体で防御する親羊の姿をよく見か

けたが、そのようなことをしようとする気配は見えなかった。そして仔羊は頼りなげに小刻みに身を震わせるばかりだった。なぜかその光景だけが周囲の景色から切り離されて、ぼくの脳裏に鮮明に記録された。

*

パンとヨーグルトの朝食を済ませた後、ぼくはダマスカスからいつも沙漠へ同行してくれるぼくの右腕とも言うべきムハンマドとかねて打ち合わせておいたように、三十五キロ離れたパルミラへ向かつて車を走らせた。

二年振りのパルミラの石柱群はいつもの晴れやかさでぼくを迎えてくれたが、天気は何かにすねているようでなかなか晴れ間を見せてくれなかった。やがて雨となり、その雨が雹に変わり、地面は5ミリ大の雹で見る間に白く敷き詰められた。雹は二十分ほどで止んだが、天気は相変わらずぐずついたらまだだった。

午後二時半頃、そろそろアブー・アブダッラーのテントへ戻ろうとフォードの四輪駆動で沙漠への帰途についた。パルミラを出て車はダマスカスへ向かうハイウェイを南西に十キロほど走るのだが、パルミラを出たとたんに、霧が立ちこめ霧は見る間に濃くなり、ミルク色の壁で辺りを覆ってしまつ

た。前方四、五メートルしか見えなくなり、ハイウェイをゆく車は対向車を恐れて亀のようにはのろのろと走らざるを得なくなつた。ぼくたちものろのろ運転をしたが、やがて十キロを過ぎると、ハイウェイから下りて沙漠へ入り、西へ車を走らせた。相変わらず霧が立ちこめているなど思いながら、運転するムハンマドの右隣で驚きの目を窓の外へ向けていた。ぼくは、どうも霧ではないように思えたのでムハンマドに尋ねてみた。ムハンマドは笑いながら「ちよつと前から砂嵐に変わったんだよ」と言つた。なるほど外はミルク色ではあるが、その色調が先ほどよりは少しばかりベージュ色を加味したものになつていて、紛れもなく外では細かい砂の粒子が白い紗を幾重にも重ねるようにして視界を遮つていた。視界は霧の時より悪くなり、もはや二メートル以上は前方が見えなくなつていた。

沙漠とは言え、轍の跡を頼りに走るわけだから、ベドウィンのトラックが向こうからやつてくる恐れはある。二十分ほど這うようにのろのろ運転をしていたムハンマドはいきなり、「このまま進んでいると正面から吹き込んでくる砂がエンジンに入り、車がエンコしてしまう」と言つた。そんなことには思いも及ばなかつた。ぼくは、「じゃあどうすればいいんだ？」と尋ねた。ムハンマドは返事をするかわりに車をゆつくりUターンさせて砂嵐が吹いてくる方向に車の後部を向けると今度は対向車が来ることを考えて轍からそれた処へ車を停めた。ぼくはすっかり自然の猛威に圧倒され、白い世界の中に取り残された不安に苛まれながら、ムハンマドのすることを黙つて見つめていた。それが終わるとムハンマドは「待つている間に腹ごしらえでもしようか？」と陽気に言つて、持つていたパンとマクドール

ス(茄子の中にピスタチオの実などを詰めものにしたもの)とオリーブを用意し始めた。食事を済ませ一時間ばかり過ぎたが、砂嵐は一向に止む気配がなかつた。やがて夕暮れが近くなつた頃、ムハンマドがようやく口を開き、ぼくに状況説明をした。砂嵐が止まない限り、アブー・アブダラーのテントに向かつて走ることはできない。一つはエンジンに砂が入つてしまふからであり、もう一つの理由はこのような状況で走ると轍が見えないから結局迷つてしまい、うまく行き着けない可能性が高い。そこで選択肢は二つある。一つはこのままここで一夜を明かし、翌朝状況を見て行動する。もう一つは暗くならないうちに、パルミラへ引返す。

ぼくはいつものように先ずムハンマドの意見を聞き、それに従うように「よし！引き返そう」と言つた。こうしてぼくたちは再び今来た道をのろのろ運転で引き返し、いつもの十倍位の時間をかけてパルミラに戻り、ホテルでその夜を過ごした。ぼくは三日ぶりにシャワーを浴び、一息つくことができたが、その夜ずつとあの仔羊のことが頭から離れなかつた。ぼくが今日次々に見舞われた寒風、雨、雹、砂嵐にあの仔羊は沙漠で何の覆いもなく晒されたのだらう。しかもこの世に生まれてきて迎えた最初の日に。

*

翌日は昨日のことが全て嘘であるかのように静かな日となつた。沙漠では天気は嘘のように変わる。騙されたとか言いたくない。約交振りを見せるのだ。午後早くぼくたちは各々アラビア語と日本語で別々の鼻歌を口ずさみながら、昨日のことがジョークであつたように思いつつアブー・アブダラーのテ

ントへ戻った。だがテントにはいつもと違った異様な雰囲気を感じられた。ウンム・アブダッラーと三男フセインの嫁さんしかテントには残っていなかった。ウンム・アブダッラーに何かあったのか？と聞くと、昨夜の砂嵐のせいで羊たちが逃げ散ってしまった、他の者たちはそれを探しに行っているとのことだった。言うまでもなく、ベドウィンにとつては羊を失うことは生活の根幹に関わる死活問題なのだ。

ところがその時ほくの脳裏には、何にもまして昨日の朝見た生まれつきの仔羊のことが、豪雨のあとワジ(涸れ谷)を襲う濁流のように押し寄せ、他のことを全て押し流してしまっていた。ほくはテントを飛び出し、まっすぐ仔羊たちの囲いの方へ向かった。金網の囲いの前に蹲っている小さな毛の塊が見えた。近づくともちがいなくあの仔羊だった。三本の脚を前に投げ出し、残りの一本は胸の下に畳まれていた。頭を胸の中に沈め、いかにも大儀そうな様子だった。体の毛は母親に比べてもらったのか白くきれいになっていて、元気のいい他の仔羊や仔山羊たちと変わりはなかった。だがその体からは仔羊たちのあの貫つたばかりの命から発せられる弾むような活力が伝わって来ないのだ。お尻の方を見ると平たく丸味を帯びた尾の下に柔らかい糞がこびりついていて、あのころころした笑い転げるように出てくる粒上の羊の糞ではないのだ。震える手で頭をそつと撫でてやると、その気配に気付いたのか気怠そうに仔羊はゆっくり頭を上げてほくの方へ目を向けた。ほくはその時思わず恐ろしいものを見てしまったようにはっとした。今まで見た仔羊の目とは全くちがう目がそこにあつた。ほくの方へ目は向けられているのだが、その焦点はほくの上にはなく、ほくを

突き抜けずと遠いところで結ばれていた。ほくは弾かれたようにウンム・アブダッラーのところへゆき、仔羊を指さしながら、「あれはどうなるんだ？」と詰問した。ウンム・アブダッラーは忙しくてそれどころではないという風で「死ぬかも知れないし、助かるかも知れないよ」と言った。それから「もう一人で乳を飲む力がないんだよ」と付け足しのように言った。「助けてやれないのか？この仔の母親はどうしたんだ？」とすっかり自制を失ってほくは喚くように問い質したが、ウンム・アブダッラーは口早に詮ないことをひとしきり言うのと、それ以上ほくに取り合おうとしなかった。ほくは再び仔羊の許へ駆け戻った。いくら探しても確かに最初の日にはいた親羊の姿は辺りになかった。ほくはなす術もなく、仔羊の側に座り込んだ。この仔は運が悪かった。この世に生まれて初めて迎えた日に寒風と雨と雹と砂嵐に晒されたのだ。ほくたちが車の中へ逃げ込んで、ホテルに避難していた時、この仔はどこかへ行ってしまった母親を呼びながら、何の防衛物もなく自然の猛威に身を晒していたのだ。ほくは先ずそのことを思った。すると胸がちぎれるような痛みを覚えた。仔羊はときどき頭をゆっくり上げた。その表情にはもはや救いを求める必死の願いや恐怖やあがきなどはなかった。そのことがほくにはただならぬことに思えた。顔を覗き込むとその仔の眼差しはすでに遠くの一点へ向けられていた。一昨日来たばかりのこの世への道をもう戻りかけているのだろうか？その眼差しには突き抜けてしまったような諦観があつた。もはや何も望もうとしない者の静止した心があつた。

ほくは突如激しい感情の波に襲われ、もはや自分の感情を制

御できなくなっていた。その感情の奔流は一刻も早くその場から逃げ出したいという形を取っていた。気がつくとはくはムハンマドに「どこでもいいから、とにかく今直ぐここを出よう」と喚んでいた。ムハンマドはほくの余りの唐突さに一瞬動揺したようだが、すぐ冷静さを取り戻し「わかった。あんたのしたいようにしよう」と言った。後で彼から聞いたのだが、彼はその時激しい頭痛に見舞われ、その場を一步も動きたくない心境だったのだ。ウナム・アブダッラーはほくの異常な様子によく気が付き、その理由が蹲った仔羊であることを察すると、フセインの女房にその仔羊をほくの見えない処に隠せと言いつけた。フセインの女房は仔羊の処へ歩み寄ると、あろうことか四肢の一つを掴み空中にぶらぶらさせながら運び去ろうとした。その乱暴さがほくの気持ち逆撫でした。ほくの突発的な行動をウナム・アブダッラーはどのように受けとめるのだろうか？またこのことをベドウィンはこれから先夜な夜なテントの中で話題にするだろうという思いが、一瞬脳裏をかすめたが、もつともらしい口実を作ったり、小細工をする余裕はもはやほくにはなかった。「あの羊が死ぬかも知れないのに、今夜このテントに泊まることはできないんだ」とわなわな震える声でほくは言った。すると彼女は「このまま返ってしまったら、アブー・アブダッラーが戻ってきた時に怒るよ」と言った。ほくにはもはやそんなことはどうでもよかった。「今度は何時戻ってくるの？」と追いつがつて聞く彼女に「二年後」と言い残し、とにかく型通りのお別れの挨拶だけはして、ほくはムハンマドがハンドルを握る車に駆け込んだ。夕暮れ間近、ぼつねんとたたずむテントに砂埃を浴びせて飛び出した車は、沙漠を貫くアス

ファルトの道を四時間走り続け、ホムスの町にたどり着いた時はすっかり夜になっていた。

*

ホムスへの途中、ほくは押し黙っていた。ムハンマドもほくの様子を察してか話しかけようとしなかった。頭の中をあの動かなくなつた仔羊が走り回り、ほくの頭をかき乱した。仔羊のあの眼差しにほくは完膚なきまでに打ちのめされていた。ほくなど視野に入っていない、ずっと遠くの何かをひたすら見つめている目を前にしてほくはあまりにも脆かった。五十九年の歳月がこの世に二日だけだけの存在にあっけなく否定されてしまったようだ。それにしてもあの仔の運命は余りに悲惨ではないか？この世に生まれて来たばかりのものを寒風、雨、雹、砂嵐が矢継ぎ早に襲い、なぶりものにするとは。しかも母親が傍らにいないとあつては！これが運命に従うということなのか？ほくはセンチメンタルな人間ではない。自他に対し、時には批判を免れえないほど非情、不寛容になれる人間だ。そんなほくにさえ、この世は限りなく不条理で、何の秩序も法則もなくいい加減で、ただ醜悪な偶然があるだけで、それらの全てが情け容赦もなく仔羊の身に襲いかかっているように思えた。仔羊が哀れでならなかった。はたしてこの仔羊は悪しき偶然に操られただけなのか？それにしてもあの仔の絶対的ともいえるべき「悲」に貫かれた諦観は、いったい何時、どのようにして獲得されたのだろうか？生命の尊厳という言葉をはくはこれまで何度か使ったが、それに初めて対峙させられたように思った。尊厳というこの捕らえがたいものにはつきりした形を与えるためには、生き物の生命という媒体が欠かせないのかもしれない。

一匹の仔羊の生命によって、尊厳というものはつきりした形で突きつけられたために、ぼくはあれほどたじろいだのかも知れない。いずれにしろあの仔羊はものうげに蹲っていたが、最も壮絶な生の渦中にいたのだらう。生に執着するという見慣れた姿ではなく、生を投げだし、その終焉をじつと待っていたのだ。生を元のところへ返還しようとして、その時の訪れを待っていたのだ。この世はまさに仮のものではなく、あの仔羊は生の源へ還って行こうとしており、置き去りにされるのはぼくの方であるように思えた。

動物は鞆一つ下げず、非所有を貫いており、ぼくはそのことにすっかり感心して、平素動物たちに畏敬の念を抱いてきたが、帰還の途につこうとするあの仔羊はもはや母親も自分の四肢も体を覆う毛も肉も骨もすべて無用とし、生命一つだけになって、非所有の極限と化していた。

後から気付いたのだが、自分でもそれが何とは定められぬまま、今までずっと気にかかっていたものが、あの仔羊によって明示されたように思った。ぼくが長年煩わされてきた、戦慄を伴う主題がそこにあるように思った。生命の真相はそれを与えられ、謳歌している時ではなく、それが失われようとする刹那に、現れる或いは問われるのではなからうか？生命を返還する時に、その生命が何であったのか、それがどのようにに生きられたのか、それが如実に示され、そして生命が完結するのではないか？リビアの作家、コーニーは生の終焉間際に、全ての衆生は生でもなく、死でもない、ブルザクという域を通過しなければならぬと言ふ。この域をどのように通過するかは、自分の生に関わる最期の機会となる。ぼくの心に重くのしかかっていたこと

とは、このブルザクのことだったようだ。

この仔羊はぼくがこれまで恐れおののき、同時に憧れもし、一種の強迫観念のようになっていたものを直裁に示してくれたようだ。今でもはつきり覚えているが、あの仔羊の身の処し方を見た時、自分の生命など、自分の余生などとるに足りないものだという気がした。丁度シーソーに乗ったぼくがあの仔羊の存在の重さ故に軽々と跳ね上げられた格好であった。ぼくは追い求めていたなどと言いながら、実はそれを失念或いは意識の中で放棄していたのだらう。いつの間にか、生命の真相から外れた脇道に迷い込み、闇雲に執着してただけだったのだらう。生命を諦め、ただそれを全うしようとして最後の生の残り火の中にひっそり身を置いていた仔羊の姿は、恐ろしく厳肅であり、激しく憧憬の念を掻き立てた。

この世で一番崇高なものは極限の「悲」ではなからうかとぼくは思う。何故ならこの「悲」の中には先ず真実が包摂されている。そして悲壮な美もある。生も死も含まれている。愛さえある。ぼくの憧憬の念の中には仔羊への強い愛があるのだ。これ以上何を望もう。だからこの「悲」を体現しているものが限りない憧憬を抱かせる力を持つのは自然なのだ。

それは野生の中で演じられた生命のドラマであり、決して文明の中のそれではなかった。ぼくはかつて野生についてこう書いたことがある「savage (野生の)」という言葉は沙漠に帰属する言葉だ。沙漠に生きるもの全てに帰属する言葉だ。そこには自然の中に生きるものたちの本然の性があるのではないか？野生の中に生の尊厳を見ることができないのではないか？人間の心の源というものもこの野生の中に見つけられるのではな

かろうか？野生を否定し、野生の外に見出そうとする倫理的規律はいつか行き詰まる運命にあるのではなからうか？動物は野生の中に生の本来のものがあり、これは全ての衆生に通じると教えているのではなからうか？言葉ではなく行いで語る生類たちの高貴さは野生の中に見出せないであろうか？生きものたちをこの世に送り出している生命界の源を思う・」

野生に関してほくは答えを持たず、ただ次々に問いを發するだけだったが、あの仔羊はほくを幾分答えの方に引き寄せてくれたように思う。

だが同時に、その言葉と現実の間の間隙を思い知らされた。言葉にしたものが現実の形をとった時、ほくは度肝を抜かれたのだ。野生の中で生命がその本質を示すようにはつきりした形をとってほくの前に提示された時、ほくはいじましまでに生いながら、動転してしまつたのだ。ほくはいじましまでに生に執着し、生を薄っぺらく引き延ばすことにかまけ、いつの間にか生命の本然の姿を見失つていたようだ。仔羊はほくに軌道修正を迫つた。世間では百歳の長寿を祝うのに余念がないようだ。ほくは百歳の長寿を肯定も否定もしないが、ただ生をそういう形で云々したくないと思つた。命の尊嚴は医療によるのみではなく、荒野に命が晒され、命がなぶりものにされた時にさえ、はつきりした形で現れうることをほくは知らされた。

*

それから二日後ほくはラタキアの友人たちに迎えられた。地中海を臨むカフェーではこの体験を話した。途中で声がつまり、苦し紛れに沙漠で初めて泣いたことを告白した。まだ泣くことができるのだと我ながら驚くほど、それはずいぶん久し

いことだつた。この出来事はほくにとつてまだはつきりしていないことが多く残つていたので、これから先ずつとこのことを考え続け、決して忘れないようにするつもりだとほくは友人たちに言つた。すると友人のサクル氏は「人生には説明できないことが多いから、必ずしも説明がつかなくてもいいのだ」とほくを慰めるように言つた。しかしほくは内心、このことだけは説明ではなく、悟りたいと思つた。

*

ラタキアを経てダマスカスに戻り、旧友のナジール氏の家を訪れた時に、彼からエジプトの友人、ヒガージーの消息を聞かされた。昨夏のことだが、ヒガージーは自宅の扉を誰にも開かず、電話にも出ず、閉じこもつてしまつた。親友の一人が心配のあまり、戸をぶちこわして中へ入ると、部屋は散乱し、ヒガージーはベッドに倒れていた。そのまま病院にかつぎ込まれたが、内臓に深刻な疾患があり、重症だと判明した・・・

ヒガージーは二十九年前にほくがエジプトで邂逅し、ほくをエジプトの奥座敷へ導いてくれた友人である。生涯家庭を持たず、人にはどこまでも優しく、自分にはストイックな人間だつた。六十二歳になるまで社会風刺漫画を書き続けた。そして沙漠から出てきたほくをこの凶報が待ちかまえていた。なぜいきなりヒガージーのことをここで書いたかというといつの間にかヒガージーとあの仔羊がほくの中で同じ場所を占めていたからだ。ヒガージーは一人で死に臨もうとしたのだろう。自分の生をそういう形で完結しようとしたのだろう。彼はすでにブルザクにさしかかっていたのかも知れない。この世に二日だけいたものと六十二年間生きたものとが、ほくの中で同じ位置を占

めて、限りない憧憬の念を抱かせるのだ。この両者がその後どうなったか、ぼくは知らない。しかし、ぼくがこの両者から一番大切なメッセージをすでに受け取っていることには変わりがない。

*

ぼくの机の上にはあの仔羊の写真が四十枚ほどある。あの仔羊の目を記録しておこうと夢中で撮ったものだ。あの目の中には多くの人生を終焉に導いてくれるものがあるのだと確信している。あの目の意味を汲み取って生きれば、あの目の意味に導かれて生きればぼくは自分の生を完結できるように思う。だからあの仔羊のことをぼくは決して忘れまいと密かに誓っているのだ。あの二日間生きた仔羊を我が師にして、ぼくの余生を生きてゆこうと思う。何だか十五年にもなった沙漠の体験の中でぼくは今回頂きに立ってしまったような気がする。つまり、今後沙漠で何が起ころうと、この体験を凌駕することはない様な気がするのだ。いかにもヒガージュらしい潔い決着の付け方の消息も加わったせいかな、今回の短い沙漠行で、ぼくはすっかり疲労してしまった。しかしこの疲労が癒えた時、ぼくを余生へ押し出してくれる新たな力が与えられるような気がする。

了 二〇〇〇・五・七

(註) 表題の次にある「われより深く死なんとする…」の一文は引用されたものが、出典が判明しないので、そのまま使わせていただいた。

